11月11日（木）　12日（金）　晴れ後曇り
宮之浦→名瀬（奄美大島）

エンジン修理と連日の強風のため思いがけず日数を要してしまったが、やっと出港することができた。

塚田家には毎日のように世話になった。珍しい料理も「三岳」もおいしかった。海から見る屋久島の山々の重なり合いが自然のグラデーションの装いを呈している。いい気分で走っていたところ、一奏港沖でアラームが鳴る。またやったかと一瞬背筋が寒くなるが、オイル漏れではなくオイルの劣化のようだ。

急遽一奏港に入りオイルを交換する。そういえばしばらく交換を怠けていた。再出港。島の西側を通る。

黒潮のせいか結構な波だ。屋久島を離れると波はおさまったが、風もどこかへ行ってしまった。

上弦の月と無数の星の下のクルージング。夜が明けると前方に奄美大島が見えている。12日10：30入港。県と海保の職員によるお決まりの事情聴取をうける。心配していたが、オイル漏れは直っていなかった。ドップリ漏れている。またやり直しだ。

11月13日（土）　曇り時々雨　名瀬

地元のバイク屋、安田氏と修理開始。今度はデブコン止めてエポキシでやってみる。新品交換という手もあるが、新品は24万5千円だという。我々にとってはきつい金額。

11月16日（火）　曇り時々晴れ
名瀬→古仁屋（奄美大島　瀬戸内町）

エンジンは14日に安田氏と私とで修理終了。針の先くらいの小さな水漏れがあるがこのまま行くよりしかたがない。8：15出港。港外は2～2.5メートルの波。追い越していくフェリーも大きくピッチングしている。

昼過ぎ、奄美大島と加計呂麻島との間の大島海峡に入る。くねくねと曲がりくねった狭い海峡だ。チャートと案内図通りに艇を進める。15：00古仁屋港到着。葛西氏が花束を持って出迎えてくれる。花束は由美子へのプレゼントだ。私にではない。由美子大感激。ゲストバースは放水路兼用。少々ドブ臭いが四方からラインをとることができるので安全だ。すぐそばにトイレ、水道、公園、歩いて5分ほどの所に生協、風呂、スタンド、コインランドリー。飲み屋も食堂もラーメン屋も。とっても便利な所だ。エンジンは今のところ異常なし。

夜、葛西氏を招き一杯飲み。彼は札幌出身だ。大いに盛り上がる。

11月17日（水）　晴れ時々曇り　古仁屋

古仁屋観光。葛西氏は二日酔い。というわけで私が運転をする。高知山からの展望、阿鉄湾の情景。どこもしっとりとした風景が広がっている。阿鉄湾には元＜アストロⅡ＞が浮かんでおり、古仁屋港岸壁には室蘭の＜悠＞が上架されていた。

11月18日（木）　晴れ　古仁屋→亀徳（徳之島）

5：45起床。11月も半ばになったせいか夜明けが遅く、まだ真っ暗だ。7：00ようやく東の空が白んできた。北の風、風力３。5ノットで帆走。冬型の気圧配置になってきたせいか北よりの風が吹くことが多くなった。14：30徳之島，亀徳港に到着。この港の入口も狭い。陸側からはリーフが張り出しており防波堤ぎりぎりを通って入港する。幅は10メートルもあるだろうか。干潮時には見えるからまだいいが、満潮時にはリーフはすっかり海の中に隠れてしまい、あたかも広々とした海に見える。恐る恐る入った港だが、地元の人たちは皆親切だ。係留場所を指示 亀徳→知名（沖永良部島）風呂の心配をしてくれる人。

11月20日（土）　曇り時々晴れ
亀徳→知名（沖永良部島）

7：30出港。風力３。デッドランなので艇速はイマイチ。エンジンの助けを借り6ノット。あまりエンジンは使いたくないが仕方がない。沖永良部島に近づく。右手に飛行場が見える。知名港はもっと先。14：30知名入港。山本氏が迎えに来てくれ係留場所を指示してくれる。海の色が変わった。コバルトブルーだ。正に南国、南海の色彩になってきた。11月だというのに二人ともTシャツ姿。道端にはミカン、シークワサー、パパイヤが鈴なりだ。「好きなだけとっても良いよ」と言われ遠慮なく頂く。木で熟したパパイヤは最高。

2012.3.10 道新 北
（日曜日）　生活 14

# 生活

住所●〒060-8711 北海道新聞生活部（郵便のあて先は住所不要です）
電話●011-210-5605
ファクス●011-210-5607
電子メール●seikatsu@hokkaido-np.co.jp

## いずみ　復興ワカメ

「ワカメができたので送るから」と、岩手県陸前高田市に住む知人から電話があった。間もなく届いた箱の中には、色つやも素晴らしい新鮮な生ワカメがぎっしり詰まっていた。

「養殖施設も流されたのに種はどうしたの？」と私。「ありがたいことにメカブが少し残っていたんだ。そこから種を採って育ったんだよ。心配かけたから出来立てを食べてもらいたくてさ」とうれしそうな声が電話から響く。「すごい。船も流されたのに頑張ったんだね」。「そうだ、復興ワカメなんだ」と元気で力強い声が返ってきた。

東日本大震災の半年前、私と夫は美しい三陸海岸を眺めながら沖縄に向けヨットを走らせていた。その海岸を想像もつかぬ巨大津波が襲い、港を、建物を、そして人間をものみこんだ。

「彼は大丈夫だろうか」。何度も電話したが、会く音沙汰がない。ヨットの旅が好きな私たちにとって三陸海岸の美しさは格別だった。それにも増して人情が厚く親切な人が多い。30代の彼もその一人だ。もう会えないなんて耐えられない。

1週間後、「生きてたぞ！」と、うれしいうれしい電話があった。

あれから1年。海にはカレイやヒラメも戻ってきているという。鍋の中では、彼が丹精込めて育てた生ワカメが茶色から一瞬と鮮やかな緑色に変わった。まるでこれから復興を象徴しているかのように思えた。

小松　由美子（63歳・主婦）
＝函館市

## 震災1年 函館それから ⑤

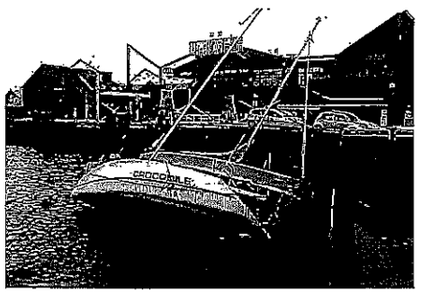
東日本を襲った大津波の翌朝、函館ベイエリアの赤レンガ倉庫群を訪れた金森商船の柳谷一美倉庫部長(56)は目を疑った。

周辺は浸たされて石畳がめくれ、魚箱や魚が散乱、カラスやカモメが群がっていた。大型の木製ベンチが何百㍍も離れた場所まで流されていたほか、観光船の浮き桟橋も大きく傾いていた。

倉庫は海に近い入り口に土のうを積んだが、他の入り口から浸水、商品も水浸しに。「果たして再開できるのか」。柳谷部長は惨状にぼう然としたが、気を取り直して一刻も早い復旧のために、被害状況の調査に着手した。

## ビジネスを守れ

# 津波対策 将来の重荷



津波の影響で横倒しになったヨット。津波は観光スポットでもあるベイエリアのいたるところに爪痕を残した＝2011年3月11日、小森松（函館支局）

防潮堤は築けない」とコスト増も覚悟して津波対策をいかに減らすかに腐心している。

49万が入居する赤レンガ倉庫群を所有する金森商船は昨年6月、新たに津波対策マニュアルを作り、函館で震度4以上の場合、臨時休業するなどの対応を明文化。また、土のうの数を4・7倍の7・1万個に増やし、ドアもパックアップを取るなど危機管理を強化した。

さらに社員30人で土のう設置の訓練を行い、25分で積み終えることを確認。津波到達時間が短い場合はすぐに避難するが、1時間以上先なら、まず土のうを積む。柳谷部長は「津波を甘くみていた。ハードよりソフト面のマニュアルをきめ細かく整理した」と語る。

函館市豊川町の水産総合商社、道水は、建屋が「盲腸」としている。物一階にあった事務所が津波で使用不能となった。震災後は事務所を5階に移し、コンピューターの全データの遠隔所のポイントの8ほか、隣接する函館運輸所の振車台、同択と安木治之）

一方、JR北海道は函館駅など止めていた特急など車両37両の浸水を防ぐ対策を考えている。（上野善織、内山毛毛、

＝おわり＝

また、心配されるのは今後の金融支援だ。日本政策金融公庫函館支店によると、津波被害の復旧などで函館市内を中心に102件約11億円（今年2月末現在）の特別貸し付けを行った。条件は優遇されているが、経営が軌道に乗らなければ将来の重荷になる。

函館朝市商組合連合会の井上薮広理事長(63)は「商売が始まった時が怖い。行政はスムーズな借り換えや、運転資金など支援を考えてほしい」と訴えている。

同社は「これほどの被害は想定していなかった。今後、対策を検討しなければ」としているが、解決策は見いだせていない。

## 行政の支援必要

函館市は北斗市内に避難する。同社は「事業の継続を何人で行うかは今のところ見送っている。荷野参事務(63)は「津波が2、3年後に来るなら保険も考えるが、年間数百万円のコストは利益に影響する」と話す。

同社に隣接して事務所を構えていたヤマダイ大作運輸は「震災後、函館市西桔梗町に事務所を移転した。津波で、トラック12台が壊れたため、今は豊川町に間に合わせのトラックを減らし、アルをきめ細かく整理した」と語る。

函館市豊川町の水産

函館新聞社